

生命の円環に戻る都市

一人間のOS(内部構造)を組み替える「土」という条件—

上野華子

1 | ディストピアという現在地

夏の異常な暑さ

生きていることが精一杯だと感じさせる近年の気候

突然、どこに発生するとも分からない集中豪雨

私たちはもうすでにディストピアを生きている—————

昨年に続き、今年もまた「ディストピアの出口」という命題について自分なりに論考し、今の私から想像しうる世界を描いてみたいと思う。昨年は都市の影を「自分とは無関係とされているもの」の現れであると定義し、影を生み出している私たちの認識のあり方に着目した。そしてその出口として、思考(言語)や社会的なラベルを一時的に外し、身体感覚を通してつながり感を取り戻し、「生命である自分に還る」ための装置としての「都会の空き地」を提案した。

今年は、影をこのように捉えたい。私たちがすでに気がついていながらも、それに取って代わるものを見出せないままに続けているこの社会活動そのもの。どうやってそこから抜け出したらよいか誰にもわからないという現状。「このままでは続かない」という事実。

地球温暖化が叫ばれるようになって久しい。私たちの住むこの地球の循環システムの不均衡と、そこから生まれている異常気象。それはもはや遠く離れたどこかで起こっている他人事ではない。その影響は、私たちがリアルに体感できる現象にまで増幅してきている。「地球に住んでいる私たちの誰しものがそこから逃れられない運命にある」このことを私たちはもう肌で知っているはずである。そうでありながら、積極的に明言されないところがある。見えているのに見ないようにしているところがある。私はこれを影と捉えて、そこを真っ直ぐに見据えるところから問題提起を始めてみたい。

そしてまた、ここに私の個人的な視点も重ねたい。私は2019年に東京を離れ、瀬戸内海の豊島へ移り住んだ。都市から離れて年月を重ねた今、ふたたび東京で暮らしたいかと問われれば、現時点での答

えは「否」である。では、どんな都市であれば私はもう一度そこに暮らしたいと思うのだろうか？かつて東京で暮らし、そこを離れた一人の人間として、「私がもう一度住みたいと思える東京」を仮想しながら「ディストピアの出口」を考えてみたいと思う。

今年、私はあるTV番組で斉藤幸平さんを知った。彼は「地球の環境危機」と「今の経済の仕組み（資本主義）」を結びつけ、「脱成長コミュニズム」を提唱している経済思想家である。彼の著書も読んでその内容に共感したが、私が感銘を受けたのは実は内容そのものではない。彼の主張は極めて真っ当な正論のように思えたからだ。それよりも私にとって衝撃だったのは、資本主義の限界が公の場ではっきりと語られていること、そして彼のような存在と言葉が社会の表舞台に現れ、広く受け入れられているという現象そのものだった。

これまで私は、資本主義そのものの限界を語ることに、どこか触れてはいけないもの、現実的な代替案がない以上は明言を避けるもの、という社会の中の暗黙のタブーがあるように感じていた。それが明言され、認知されているということは、「このままでは続かない」という認識がもはや一部の人のものではなくなりつつある現れなのではないかと思えた。そして、彼の著作に書かれていたことの中で最も私の関心を引いたのが、「資本のための資本」という概念だった。これについて彼の著書の中ではこのように書かれている。

マルクスは資本を“運動”と定義しているのです。どんな運動かというと、絶えず価値を増やししながら自己増殖していく運動です。

(中略)要するに、資本とは金儲けの運動であり、この金儲けを延々と続けることが第一目標になっている社会が、資本主義なのです。¹

地球の資源というキャパシティを超えた活動を生み出し続けている「資本のための資本」という原理。私はここに「ディストピア」を現実のものとしている元凶があるのではないかと思った。そして気になったのは、この資本運動を動かし続けている人間の原動力(動機)の方である。それはなんなのだろう？素朴な疑問が湧いた。これまで人間の精神や意識を探求してきた私としてはそこが気になった。

冷静に考えてみれば、この仕組みがいずれ立ちゆかなくなることは小学生でもわかりそうなことだ。資本主義が自己増殖していく運動だとすれば、そこに無理があることは誰にでも理解できそうに思える。それでもそのことに疑問を持てぬまま、幻想に組み込まれたまま走らせてしまっているのはなぜであろう？そのように私たちを駆り立ててしまうものとは、一体なんなのだろうか？

2 | 生命の円環から外れた人間活動

2.1 | なぜ生命の円環から外れたのか

私たちはみな、自分の身体というものを一つしか持ち合わせていない。そして身体は際限のない増殖運動を許容できない。なぜなら身体には「十分」という機能(分別)が備わっているからだ。たとえばどれだけ空腹な状態にあったとしても、どれほど贅を尽くした食事をしたとしても、そこには限界がある。百年分の食事を一気にしてしまえるだけの素養を私たちは持ち合わせてはいない。それなのに、私たちをもっともっとと錯覚させるものはなんだろうか？自分の「十分」をはるかに超えてその先へ駆り立てるものはなんなのだろうか？なぜ身体には「十分」があるのに人間は「もっと」を止められないのだろうか？

私は人間が持っている欲望自体を否定したいわけではない。身体的な欲望も含めてそれは自然なものであるし、より快適に、より豊かに、より楽しく生きたいという願いは私たち人間が社会や文明を発展させる原動力になっている。けれど、金儲けを延々と続けることが第一目標になっている仕組みから降りられないのだとしたら、それはなぜなのだろうか？

私はここに、現代の私たちが陥っている何らかの不都合な状態があるのではないかと推察する。そこには、私たち人間に備わっているある強力な機能の働きが鍵を握っている。その機能とは思考である。人間と地球上の他の生物との明らかな違いのひとつは、思考という機能をこれほどまでに発達させてきたことにある。思考という道具を用いることで私たちはこれだけの社会や文明を作り上げてきた。

ただし、思考と身体では根ざしている原理が違う。身体は「今ここ」にある機能や感覚に紐づいている。一方思考は、「今ここ」にあるものに紐づいているとは限らない。思考は過去や未来を想像することができる。過去を懐かしみ、未来に希望を描くことができる。過去を嘆き、未来を憂うことができる。これは思考が持つ機能の大きな特徴の一つであるが、このこと自体が問題なのではない。問題は、それが過剰になってしまった場合のことである。思考が過剰になることで、「今ここ」で身体が感じている「十分」や、目の前にある現実——地球の資源が枯渇し始め、均衡が崩れ始めているという事実——にならうことができなくなってくる。今このリアルな現状からかけ離れていってしまう可能性があるということだ。

それは例えば、

眠いのにも働く。

疲れているのに休めない。

空腹ではないのに食べる。

スマホや動画を延々と見続ける。

身体が嫌だと言っているのに何かをやめられない。

このような形で表出する。こういった現象を私たちの誰しもが体験したことがあるように思う。それはつまり、現代の社会ではそれがデフォルトになっているということだ。「道具は使いよう」という言葉がある

ように、問題は道具そのものにあるのではなく、その使われ方にある。思考が過剰に刺激され肥大化したことで、意識と身体の接続が切れてしまっているのが私たち現代人が置かれている現状なのではないだろうか。そして、思考が肥大化して身体の「十分」を感じ取れなくなった状態と、地球の環境を破壊していると知りながらも「資本のための資本」を生み出す運動をやめられない状態。ここには同じ原理が働いているのではないか？私はここに相似を見てとることができると思った。人間の内部構造と、外側に現れる現象との相似である。

豊島にはかつて、「トトロのトンネル」のようと言われていた場所があった。ある日そこを通ると、道沿いの草木が無惨に伐採され、無理やり引き裂かれたような大木の姿もあった。私はその変わりように驚き、とても胸が痛んだ。後日、それは島に住む一人のおじさんがやったのだと聞いた。トンネルの近所に住む人も、仲の良い友人も、そのやり方に憤っていた。私たちには、なぜこんなことができるのかが理解できなかった。

私には、そのおじさんが、目の前にある障害物をどう解決するかという目的・効率・都合だけを採用し、景観やほかの植物、土壌など周囲に及ぼす影響はまったく考慮しなかったように思えた。さらには、もしかしたら感性が閉じているのではないかという考えが浮かんだ。感性とはいわばセンサーである。何かを感じ取る性質のことだ。無惨に切られた森を見て胸を痛める人は、それを見て自分の内側に生じる感覚を通して痛みを感じる。しかし、思考が過剰になり感覚との接続が薄れている状態では痛みを感じられないのかもしれない。私がこの一件から推察した「感性の欠落」と同じ原理が、大きさや形を変えて今の社会の中で働き、その結果として環境破壊を生み出しているのではないだろうかと思えた。

もうひとつ、思考の特徴として物事を切り分ける性質というものがある。これは物事を客観的に捉えて把握するのには適していて、前述のように、私たち人間が発展する上で大きな役割を果たしてきたことは事実だ。しかしここでも同じことが起こりうる。切り分ける機能が過剰になると、自分もまた生命の繋がりの中に存在しているという実感が薄れていってしまうのではないか。結果として、生命システム（地球や自然界に働いているシステム、つまり生命の円環）の中にいるということを忘れてしまう。

2.2 | 今も身体に息づく円環システム

では、私たちが忘れてしまった「生命の円環」とは何か。地球の生命システムや自然界の生態系の中には、自己調整作用ともいうべき働きがある。この作用により、種として、全体としてのバランスが調整され、循環が続いていく。これについてはイギリスの科学者ジェームズ・ラブロックが提唱した「ガイア理論（ガイア仮説）」が有名だ。地球とそこに生きる生物は互いに影響し合い、生物は環境に適応するだけでなく、自ら環境を作り変えながら、生命が存続しうる状態を形成してきたとする考え方である。²

人間も本来は自然や動物の一種であり、このシステム（生命の円環）の中で生きていた時代が長くあった。しかし現在、人間の活動は地球の循環システムに大きな負荷を与え、その均衡を崩すほどの規模にまで拡大している。私はこの「人間活動が生命の円環から外れてしまった状態」をディストピアと定義したい。しかし、ここで重要なことがある。身体は今もその原理から外れていないということだ。生命には、過剰になれば止まり、不足すれば求め、全体を一定の範囲へ戻そうとする働きがある。私たちの身体もま

た、東京のど真ん中にいても、呼吸し、水を飲み、食べ、排泄し、眠り、代謝し、老いていく。

人間の「活動」が生命の円環からどれだけ外れてしまっていたとしても、個々人が持っているこの「身体」そのものは常にその法則に従って機能し続けている。生命の法則から一瞬たりとも外れたことはなく、私たちの身体には今も生命の円環のシステムが息づいているのである。問題は、思考が肥大化してしまったことにより、私たち人間の意識が身体(＝生命の円環)との接続を失ったことにある。そして、その状態から生み出されたアクションの集積が生命の円環から外れた現状を生み出してしまったということだ。だから、生命の円環に戻るという時、まず戻るべき場所は自分の中にある。人間の意識を、今も円環の中で機能している身体へとまずは接続し直す。それが、私たちがあたらしい社会や文明を作っていく上で欠かせないのではないか。

ここで、今現在の私たちの状態を式にしてみると、

思考 > 身体・感覚

となる。もう少し正確に表現すると、

意識 → 思考 → 身体

となる。思考が身体感覚を凌駕したことで、意識が思考の中に入り込み、思考の判断によって身体を動かしている状態だ。「思考が判断する→ 身体をその判断に従わせる→ 行為が生まれる」これが常となっている。社会や文明はそれ自体で勝手に生まれているものではない。どんな時代、どんな土地の文明であっても、その根には、それを生み出した人間の認識、判断、欲望、恐れ、価値観、つまるところ人間の意識がある。

意識 → 思考 → 身体 → 行為 → 社会・文明

そのため、思考が生命としての身体から大きく乖離した状態で文明をつくれれば、その文明もまた生命の円環から乖離していくのは必然である。人間の内部で起きている分離が、文明の構造として外部に現れている。ゆえに社会や文明を変えるには、それを生み出す人間の意識のあり方をそのものを転換する必要があるのではないか。ディストピアの出口とは、人間活動を再び生命の円環の中へ戻すこと。そしてそ

のためには、まず人間の意識を、今なお生命の円環の中にある身体へ戻す必要がある。私はそのように考えたい。

2.3 | 変えるのは人間の内部構造から

ではここから、外れてしまった生命の円環にどうやって私たちは戻っていくのか、その具体的な提案をしていきたい。これまで見てきたように、まず必要なのは、私たち自身の内部構造を組み替えることである。そのためには、意識の接続先を思考から身体(感覚)の方へ切り替えていくことが必要になってくる。これは、頭で理解し価値観を変えることで達成される理念上の話ではなく、実際に仕組みを転換するという実質的な話だ。身体との接続が薄れ、思考を起点として行為が生まれている状態から、身体との接続を取り戻し、そこを起点として思考を「活用」して行為が生まれる状態へと変えていく。

では、この転換をどのようにして起こすのか？そのためのアプローチとして、瞑想、ヨガ、ダンス、アート、スポーツなどが考えられる。ただしここでは、そのような特定のワークや行為に解決を見出すのではなく、「都市」そのものを使ってそれが起こるアイデアを提案したい。理由はもちろん、これが都市についての提案を行うコンペだからだが、重要なのはそれだけではない。特殊な環境に身を置いたり、集中的に取り組んだりすることはたしかに有効だが、それだけでは関心を持った一部の人や、続けられる精神力を持った人にしか変化が起こらない可能性があると思う。

ここで私の実体験に少し触れたい。私自身、思考から感覚へ意識の接続を変える実践をしている。去年豊島で「森のリトリート」という企画を行い、講師を招いて1泊2日でその体験をした。森、海、美術館など場所を変えながら集中的な実践をすることによって、私は、思考から感覚へ意識が切り替わる感覚をつかんだ。こうした非日常の体験はとても有効だが、それと同時に、日常の中で実践をしていくことがとても大切だと感じている。なぜなら私たちは日常を過ごす時間のほうが圧倒的に多いからだ。さらに言うと、一日の中で一時間だけ集中的な実践をするよりも、一回の時間は短くても、日常生活の中で思考から身体感覚へこまめに何度も意識を戻すアプローチの方がはるかに有効だと実感している。

近年、このような取り組みは「マインドフルネス」や「右脳回帰」などとして知られ、思考から感覚へ意識を切り替えることを繰り返すことで、思考優位だった状態そのものが変化したという体験も数多く報告されている。その仕組みとして語られる脳内メカニズムは科学的に実証されたものではないが、経験や反復によって脳の神経回路が変化する「神経可塑性」そのものは広く立証されている。だとすれば、ほんの短い時間であっても、感覚へ戻るといふ小さな切り替えを日常の中で何度も繰り返すことには、私たちが思う以上の意味があるのではないだろうか。そしてその小さな切り替えを都市そのものに埋め込んでみてはどうだろうか。都市で毎日生活しているだけで、自然と意識が身体に接続し直していく仕組み。そのように運ばれてしまう装置のようなものを私は考えたいと思った。でなければそれは私たちのデフォルトにはならないだろう。あたらしい都市や文明を生むためには、一部の人の価値観を変えるだけでは十分ではない。私たちのデフォルトがすでに思考優位であるように、そのデフォルト自体を変える必要がある。では、その具体的な方法について提案してみたい。

3 | 生命の円環に戻る仕組み

3.1 | 都市の中に土を露出させる

それは、今現在の都市の中から舗装を剥がし、土を露出させるということである。その目的はとてもシンプルだ。土に触れて感覚を取り戻すこと。

裸足になって足裏で土を踏む 手で土に触れる 匂いを嗅ぐ 触感

冷たさ 温かさ湿っぽさ かたさ やわらかさ

それらすべてが身体を刺激して、その一瞬、私たちは感覚に接続することができる。ただそれをするための土の露出を都市の中に作るのだ。なぜ土なのか？それは、生命の円環を支える基盤のひとつが土壌だからである。それを私たちが円環に戻るための道具として使う。そして土は本来どこにでもある。都市の中にも、舗装される以前には土があった。

アメリカのポートランドから始まった「デパビング」は、オランダなどほかの都市にも広がっている。舗装を剥がして地面を取り戻すことで、雨水を地面へ浸透させ浸水リスクを軽減したり、ヒートアイランド対策、生き物の生息環境の回復などにつなげる取り組みである。もちろんこれらはとても大切な試みだ。けれど、今回の提案はこのさらに手前の話である。言ってみれば、環境改善の前の人間改善の話だ。環境に変化を起こすその手前で、まず私たち人間のあり方に変化を生むための装置として土を使う。3

思考の下に身体があり、

舗装の下に土がある。

どちらも、分断されてしまったものをもう一度取り戻すという意味でリンクしている。では都市の中に土が現れることでどのようなことが起こりうるのか？ちょっと想像してみよう。

【シーン1】

朝、駅に向かって足早に歩いている。ベビーカーを押して保育園に向かう途中だ。
頭の中には、「何時までに保育園に着かなきゃ」「あ、着替えを一つ忘れたかも」
「会社に着いたらまずやることは」
「夕飯の食材がないから帰りにスーパーに寄らなくちゃ」など途切れなく思考が流れている。
いつものことながら頭の中の考えがいっぱいで、目の前の景色を味わう余裕なんてない。
保育園に子どもを預け、駅へと向かう。

あれ、なんかできている。土だ。
「ご自由に身体感覚をお楽しみください」って書いてある。

どうのことだろう？と思いながらなんとなく私は土に手をのばしてみた。
やわらかい。目をつむって深呼吸を2～3回。土の匂いもかいでみる。おちつく香り。

私はそこでほんの5分ほどの土との接触を楽しんだ。手を払い、ふたたび駅へ向かう。
「あ、風が気持ちいい」
「さ、電車に乗らなくっちゃ」

【シーン2】

数日後の週末の昼下がり、駅前の本屋に子どもと出かけた。
途中、またあの土のところを通りがかる。
するとそこに60代くらいのおじさんがいて、土の上で裸足になり壁にもたれていた。
それを見た子どもが裸足になりたいという。
迷ったが今日は特に予定もない。帰ってもきっとYouTubeタイムになるだけだし。

子どもを裸足にさせると足で土を混ぜはじめ、手で土をつかんで山を作り出した。
おじさんは時おり目をつむって足裏の感触を楽しんでいるようで、
こちらを嫌がっているふうもない。
「よかったらいかがですか」おじさんが土を指して声をかけてくれた。
そこで私も靴を脱いで裸足になり、足裏を土につけてみた。ひんやりとして気持ちがいい。

目をつむってその感触を味わいながら、足を動かしてみる。

さっきおじさんがそうやっているのを見たからだ。

「わぁ」思わず声が出た。

「気持ちがいいですね、土って」おじさんがそう言い、

私も「きもちいいですねー」と答えた。

会話はそれだけ。あとはただそれぞれに感触を楽しみ、その場を離れた。

今日一緒に土を踏んでいたあのおじさん。どこの誰なのか、名前も職業も年齢も知らない。

そこから会話に発展することなく、SNSの交換だってしてない。

それでもあんなふうに通じ合えることってあるんだ。

あのおじさんもきっとこの街に住んでいるんだろうな。

それまで、この街に住んでいても知り合い以外はすべて無関係だと思われていた世界に、

なにかあたらしいものを発見したような気持ちだった。

ここに描いた2つのシーンはもちろん私の想像の中の出来事だ。けれど、都市に露出した土が私たちの感覚を呼び覚ますことで、このようなことが起こる可能性はあると思う。最初の場面で起きたのは、それまで思考の中に入り込んでいた意識が、土に触れることで身体感覚へ戻ったという小さな切り替えである。

意識 ↔ 身体

次の場面では、そこからさらに他者との間にも接続が起こった。

意識 ↔ 身体 ↔ 世界

ここで私が特筆したいのは、他者との間にいわゆる「関係」と呼ぶようなものが生まれたわけではないということだ。相手の属性は何も知らぬまま、そこで一緒に土の感触を味わい感想を共有しただけである。次に会う約束もしていないし、知り合いになったわけでもない。しかしそこではもう「無関係性」は消失している。知り合いではないが、無関係でもない。

私はここに、これから私たちがあたらしい文明や都市を作っていく上で鍵となるひとつの転換点があるように思う。現代の都市では、毎日たくさんの人とすれ違いながら、そのほぼすべてを自分とは「無関係の人」と認識して生きている。この「関係のあるもの／無関係なもの」という識別もまた、世界を切り分けて捉えることで生まれたことのひとつなのではないだろうか。自分とは「無関係」であると認識したものに対して、私たちは自分の行為がそこにどのような影響を及ぼすのか想像しにくくなる。それが遠くの土地や、見知らぬ誰か、まだ生まれていない未来の人々であればなおさらだ。その結果、生命全体とのつながりから切り離された、行き過ぎた判断や行為も可能になってしまう。

もちろんすべての人と「関係」することは不可能だ。けれど、本来私たちは「無関係な」存在同士だろうか？ 同じ土地に暮らし、同じ空気を吸い、同じ暑さを体験している。地球の環境が激変すれば等しくその影響を受ける者同士である。知り合いではない。けれど無関係ではない。社会的な属性や言葉を介した関係による認識の手前には、同じ場所に身体を持って存在している者同士としてのつながりがすでに存在している。そのことが理屈ではなく感覚としてわかるということ。身体を通して実感できる可能性はあるのだ。

昨年私はこのことを、豊島で毎夏行われる「唐櫃浜の盆踊り」の体験の中に見出した。「盆踊り」の輪の中に入って踊ることで、そこで共に踊っているすべての人と瞬時に「つながっている」感覚を得られてしまうという体験をした。盆踊りは私たちを意識転換させてくれる素晴らしい伝統行事だが、非日常的な装置である。これを日常生活の中で実現することを想定したとき、「都市の中に土を露出させる」という提案が生まれた。土は、それを思い出すための媒介にもなりうるのではないかと思う。

3.2 | 結果ではなく、条件を設計する

とはいえ、土という媒介を通じて人々の意識が思考から身体感覚に再接続された先でどのような展開が起こってくるのか？ 正直なところ、それは私には予想ができない。個人の中にどんな変化が生まれ、個人と個人の間にどんな作用が生まれ、それがどんな活動を都市の中に生んでいくのか。その全貌を描き出すことはできない。なぜならそれはこれから生まれていく領域だからだ。

そもそも都市や文化、文明は、特定の誰かがデザインして作り上げているものではない。そこにいる一人ひとり(要素)が寄り集まり、その総体として出来上がっているものである。地球に自己調整機能があるように、都市そのものを一つの有機体と捉えるなら、有機体の姿は一つ一つの要素の働きや条件によって決まってくる。要素が生命の円環からかけ離れていれば、そこから生まれるものもそのようになる。要素が生命の円環とふたたびつながり直せば、そこから生まれる行為や関係が変化し、その集積である都市もまた、生命の円環の一部としての姿を現す可能性がある。だからそのために土を使う。

土を使うことが最適解なのかは分からない。これは一つの提案にすぎない。私がここでしたいのは、ディストピアの出口として完成された結果を設計することではなく、そこに住まう人たちが出口としての都市を生み出していくための条件作りである。つまりは人間である私たち自身の土壌作りだ。私たち一人ひとりが自らの生命の円環につながり直すことにより、生命全体の円環に再接続する。そこから何が生まれるかは設計せずに、何かが生まれうる条件を設計する。そのためのきっかけをつくり、都市が自ら生成し

ていく条件を整えるということだ。

3.3 | 西荻窪から始まり、東京全体へ

では、この「条件」を実在する都市の中で実装するとしたらどこがよいだろう。もう東京では暮らせないと思っている私がふたたび東京で暮らすとしたら、どんな街であれば暮らしてみたいと思うだろうか。それをリアルに想像するための場所として、私はこれまで自分が実際に通ったり暮らしたことのある新宿、浅草、西荻窪を思い浮かべた。その中でも、子どもを産み育て、仕事に通い、家族を持って生活していた西荻窪を選んだ。西荻窪で始まった「子どもを育てながら生活する」という私の人生のステージは、豊島に移った今も続いている。だからこそ、今の自分をかつての暮らしに置き直し、「もし今ここで暮らすなら」をリアルに想像しやすいと思ったのだ。

西荻窪の中でも、自宅から駅へ向かう途中にあり、仕事、保育園、買い物などで幾度となく歩いた、通称「乙女ロード」と呼ばれる旧府道を選びたい。西荻窪駅南口から五日市街道へ続くこの道は、住宅の中に小さな商店や飲食店が点在する日常の生活動線であり、地域住民だけでなく、西荻窪を訪れる人々も雑多に行き交う道である。今回提案したいのは何かの目的のために訪れる特別な施設ではない。都市での日常生活の中に、身体感覚へ意識を戻す小さな契機を埋め込んでみるという提案だ。

家から駅へ向かう 仕事へ行く 保育園へ行く 買い物をする

お店に立ち寄る 散歩する 家へ帰る

重要なのは一度長時間体験することではなく、日常生活の中で何度もその小さな切り替えに出会うことである。だからまずは、一つの大きな場所をつくるのではなく、旧府道の舗装を部分的に剥がし、何箇所かに土を点在させるところから始めるというのがその案である。

実装計画 | 西荻窪・旧府道

01 | 敷地条件

旧府道は区道1258号。認定幅員約5.45～5.49m、40型舗装の生活道路で、無電柱化はされていない。

02 | 実装原理

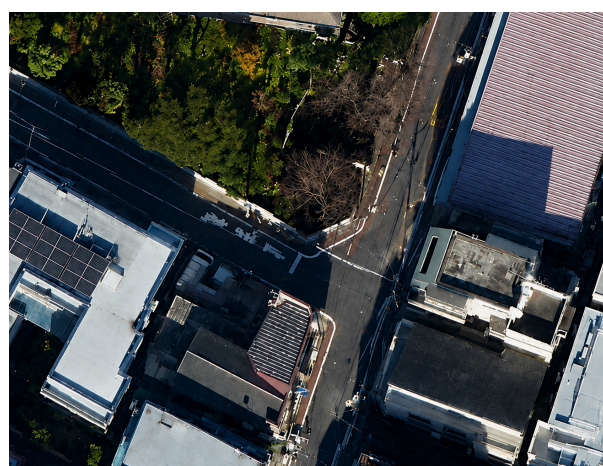
約600mを一律に脱舗装せず、交通、沿道アクセス、排水、道路設備、地下埋設物等の条件を確認しながら、舗装を剥がして「土」を露出できる場所を点在させる。

03 | モデル地点

具体例として、CAFEオーケストラ向かいの住宅角地を選定。低層住宅によって空が開け、南北の旧府道と東西の生活道路が交わる。住宅には杉並区保護指定樹木と表示された大木があり、斜めに走る塀と道路との間には三角形の余白がある。



図版1 | 旧府道 位置図



図版2 | モデル地点 航空写真

04 | 介入方法

現在のゴミ集積所は近隣への移設を前提とし、住宅の塀と道路の白線との間の舗装を帯状に剥がして、土だけを露出させる。寸法は現地調査・測量を経て決定する。植栽やベンチ等は設けない。あえて「ただの土」とすることで都市に小さな違和感を生み、土に触れ身体感覚へ意識を戻すための簡単な「手引き」のみを掲示する。

05 | 実行プロセス

まず旧府道の数か所で小規模な社会実験を行い、人の利用、交通、安全性、雨天時の状態、維持管理等を観察する。実装 → 観察 → 調整 → 展開を繰り返し、その結果から次の場所の位置や規模を決め

る。どこまで土を広げるかという完成形を先に決めず、そこで起こった反応を受け取りながら都市そのものを生成させていく。

06 | 主体・管理

道路管理者である杉並区を中心に、沿道住民・店舗・利用者等との協働を想定する。道路区域、地下埋設物、排水、保護樹木の根系等を調査したうえで詳細設計を行う。

07 | 既存の都市施策との接続

杉並区では、豪雨やヒートアイランド等への対策として、透水性舗装、雨水浸透、雨庭など、自然の機能を都市へ取り戻す取り組みが進められている。本提案もこの方向性と矛盾しない。4

ただし、ここでは環境面での機能に加え、人間が土に直接触れることで身体感覚へ意識を戻すという、人間側への作用を都市の機能として加えたい。水を土へ戻すと同時に、人間もまた土を介して生命の円環へ戻っていく。

08 | 西荻窪から東京へ

旧府道で始めるこの試みは、この一本の道だけで完結するものではない。社会実験によって有効な方法や課題が見えてきたなら、西荻窪のほかの生活動線へ、さらに東京のほかの地域へと展開していく。ただし、同じ形の「土の場所」を複製するのではない。それぞれの地域で、「ここなら舗装を剥がせる」「ここなら人が土と接触できる」という場所を見つけ、その土地固有の条件に応じた形を生み出していく。

共通するのは、舗装によって閉ざされていた地面を、人間が再び直接感じることでできる場所へ戻すという原理だけである。一つの完成された都市モデルを複製するのではなく、同じ原理から無数の異なる形が生まれる。大きさも、形も、土だけの場所も、そこに別の要素が加わる場所もあるだろう。例えば、都市の中に巨大な「土のプール」が出現するかもしれない。裸足で歩き、転がり、全身で土を感じながら身をあずけられる場所。そしてそこは、人間が土から感覚を受け取るだけでなく、人間が土を育てる場所にもなりうる。素材を持ち寄り、手足を使って耕し、土が育っていく。できた土の心地いい感触をまた味わう。そんな、土と私たちが循環する場さえ生まれてくるかもしれない。

このように、原理を共有しながら「土の場所」は各地に伝播していく。そして、感覚に戻るための「土」という装置は、やがて私たちの暮らしの中で当たり前のものになっていく。

コンビニのように カフェのように Wi-Fiスポットのように

東京のいたるところにそれらが存在し、人々は自分の感覚に接続することを、そして感覚を通じて他者や世界とつながることを楽しむようになっていく。

4 | 再接続した人間が生み出すあたらしい社会

感覚に接続し直すことは思考を失うことではない。人間はこれからも思考を使い続けていこう。けれど、過剰な思考に支配され、そこにロックオンされている状態から感覚にふたたびつながり直すことで、私たちは身体が教えてくれる合図やサインを受け取り、自分自身や周りとのつながりを感じられるようになる。

意識と身体がリンクし、身体からの情報を受け取りながら思考を使うことができるようになれば、そこから導き出されるものも変わっていくだろう。その作用は、一人の身体 → 一ヶ所の土 → 一本の生活道路 → 地域 → 都市へと続いていく。同時に、都市の環境が一人ひとりの身体へとまた作用する。身体が都市を変え、都市が身体を変える。その循環が生まれることによって、都市そのものが少しずつ生命の円環へ戻っていく。そして、感覚を取り戻した私たち一人ひとりからは、あたらしい発想が生まれ、あたらしい営みが生まれ、あたらしい関係が生まれる。そして、あたらしい社会、あたらしい都市、あたらしい文明が生まれていく。

昨年、「ディストピアの出口」というテーマと出会った時からずっと、私の中には一貫して同じ想いがあり続けている。それは、「どういうカタチ(都市)をデザインするか？」ということよりも、そもそも都市を生み出している私たち人間自身をどうデザインするかということの方が重要であり、真に根本的な解決になるのではないかということだった。どんなに斬新なアイデアを考えても、どんなにユニークなものを生み出しても、根本の原理が変わっていなければそれは単なる真新しさでしかない。そして私たちには、そういった目先の真新しさだけを楽しんでいる余地はもうあまりないように思える。今、もっと本気になって取り組まなくてはならないことは、今私たちが乗っかっている社会のシステムでは立ち行かないという事実と真正面から向き合い、それに代わるシステム、暮らし方、社会のあり方を真剣に考えていくことである。しかもこれは、見通しが効く特定の識者や賢者だけが考えるべき命題ではない。この社会を構成しているすべての要素、つまり私たち全員が同時に取り組んでいくことだ。

この論文を書き終えようとしていたある日、私はマルクス・ガブリエルという哲学者の存在を知った。彼もまた現在の資本主義の限界を問い、経済的価値と道徳的価値を結びつける「倫理資本主義」を提唱しているという。私はその方向にとっても共感した。そして、道徳的価値を経済へ組み込み、新しい社会の基準や仕組みを書き換えていくこと、これこそまさに思考の領域だと思った。だからこそ、である。思考を使う人間の意識をまずは組み替える必要がある。思考が本来の仕事を成し遂げるためにも、それを使う私たちの意識が生命の円環との接続を取り戻さなければならない。5

要素の状態をトランスフォームしなければならないということ。

つまるところ、私たち人類のOSのアップデートだ。

思考中心で生き、生命の円環との接続を失っている今のあり方から、身体感覚に根差し、自分との

つながり、他者とのつながり、世界とのつながりを感じられる状態へシフトしていく。それは原始に戻ることはない。もともと身体とつながって生きていた私たちは、思考を発達させることで社会と文明を発達させてきた。そして、人間活動と地球環境が折り合わなくなってきた今、私たちはあらたなフェーズへ移行することを余儀なくされている。ふたたび身体感覚(生命の円環)とのつながりを取り戻し、その上で、私たちが発達させてきた思考という道具を使っていくというフェーズである。

私は、これは人類に求められている進化の道であると思っている。ここを超えられなければ、私たち人類に存続の道はないかもしれない。悲観的なことを言いたいのではない。冷静に考えてそれくらい切羽詰まった状況にあるということだ。私は、ディストピアの出口としての都市がどういうものであるかは描いていない。それを生む土壌を作るための条件を提案しただけである。なぜなら、私たちの進化の方向性は見えていても、そこから描き出され、生み出されていくものは未知だからだ。私はそれを見たいと思っている。

思考は、想像力に形を与えるものでもある。人間が生命のつながりの中にあるという感覚をしっかり持った上で想像力を働かせた時、そこにはどんなものが描き出されていくのだろうか？どんなテクノロジーが生まれ、どんなアイデアが生まれ、どんな造形物が生まれ、どんな関係性が生まれていくのだろうか？私はそれをとても見てみたい。そこには未知の可能性と希望があるように思うからだ。道具は使いようという言葉のとおり、人があらたな形で思考というものを携えた時、そこには、やさしく、豊かで、活き活きとして、つながっている安心感とめぐる心地よさを感じられる、まだ誰も見たことのないあたらしい社会と文明が生まれていくんじゃないか。

私は、人間も含めた生命体というものに組み込まれている自然の働きに全幅の信頼を置いているのかもしれない。それをデフォルトにした状態で私たち人間がこれから生み出していくものを見たいと思うし、その世界に暮らしてみたい。私は豊島に暮らすようになって、特に約束をしていなくても、知り合いでなくても、簡単につながり合える現実があることを知った。私たちはみんなそもそも同じ人間であるということを感じられることを知った。それを都市の中でも体験することができるとしたらどうだろう。そんな都市であったならば、私はまたそこで暮らしてみたいと思う。

それはきっと、生き物たちが互いにその生命を謳歌している楽園のようなところだろう。

そのためのきっかけとして、私はそこに土を置いてほしいと思うのである。

参考文献・参考資料

- 1 斉藤幸平『ゼロからの『資本論』』NHK出版新書、59-60頁。
- 2 陽 捷行「世界の神話と主な宗教に見られる土壌と大地」『日本土壌肥科学雑誌』87巻4号、2016年、267-277頁。
- 3 一般財団法人建設物価調査会「都市が地球と植物のためにコンクリートを剥ぎ取る」『建設物価』2024年8月号。
- 4 杉並区「グリーンインフラを活用した取り組み」杉並区公式ホームページ。
- 5 マルクス・ガブリエル『倫理資本主義の時代』土方奈美訳、斎藤幸平監修、早川書房、2024年。